

---

**卍屋 THE 随茶璃**

silverdream

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

卍屋 THE 随茶璃

### 【Nコード】

N4370BA

### 【作者名】

silverdream

### 【あらすじ】

フリーター田中 智吉（たなか とまきち）が駄目もとで開いた、なんでもや「卍屋 THE随茶璃」一（よろずや ざ ままぢやり）の経営はまったくもうからず。。半年が過ぎて行った、ある冬の日彼のもとにある一通の（まともな）依頼が入ってきた・・・彼の最初の依頼の裏には・・・自由人、田中は集めたピースを組み立て「真実」という名の一枚の絵画に仕上げる！！

## STORY

### 挨拶（前書き）

全然先が不透明な、物語なので更新するかさえも不明です。文章力はだめだめなうえ、ネタもあんまり考え付かないのでご了承ください。

皆様の寛大な心で、お見逃しく下さい  
よろしくおねがいします

「正屋……それはどのような職業か？それは少し頭のいい人ならすぐに分かるであろう。」

「正一まんじー万時　　となるつまり、

「よろずや」ぞくにいう何でもやである。報酬さえもらえれば頼まれたどのような仕事もこなす。

汚職や、欲望、犯罪がありふれているこのご時世。なんでも屋などなくても、金で、権力ですべて思うがままになるのではなるのではないか？

いや、何かやってほしい人がいる限りなんでも屋は滅びることない。

そんな中、まあ……たたく金がないフリーターの男、田中 智吉（たなか　ともきち）が駄目もとで何でも屋の

「正屋　THE随茶璃」を開店した

「よろずや　ぎ、ままチャリ」という。彼のネーミングセンスの悪さは私（語り手）の優しさに免じて触れないで上げよう。名付けた理由としては、海をまたがなければどこでもママチャリで行くというらしい。たとえば、青森の青函トンネル付近から九州の桜

島までもママチャリで行くらしい。彼の事務所は神奈川県箱根にあるのだが・・・

そんなある日、田中のもとにある依頼人がやってきた・・・

ある冬の日

三回のノックのあと 「どうぞ」と田中は言った。  
から〜んから〜ん ドアが開くと同時に古い鈴が鳴る。

「いらつっしやいませ、ようこそお屋へ」このとき田中は内心、久々の客だっ！と意気込んでいた。

入ってきた男はタキシードをしつかりと着込んだ初老の男性と60代ほどのだった。

「わたしは・・・」と言いかけた男性を田中がさえぎった

「あなたは、黒川家執事ですね。」  
すると男性は度肝を抜かれたように仰天した。

「な、なぜそれを・・・」

「簡単なことです、まずあなたの着こなしたタキシード。この近くに会社はありません、それにこの事務所の前の道は一方通行でタクシーも通れない、となるとサラリーマンじゃない。それだけじゃ確証がないのですがあなたのはめている白い手袋と、あなたのノックの回数でわかりました。通常、最近の人はノックを二回しかしません。しかしあなたは、三回しました。これは国際マナーとして通用している回数です。つまりかなりの教養がある人。決め手は、あなたの襟にあるブローチです。その紋様は黒川家の独特の紋様ですから。これらから導かれる答えはあなたが執事だっということですよ。」

しばらくの沈黙の精霊が飛び交った後……

パン、パン、パン、パン

「すばらしいよ、すばらしいやはり私の目に狂いはなかった、ここへ来てよかった……どこぞの株式会社、なんと探偵社なぞほざいてるところよりずっと明晰な頭脳を備えている。」

40代ほどの男は黒川 剛佑（くろかわ ごうすけ）と名乗った。黒川家次期当主らしい。執事のほうの男は龍川と名乗った。

さすがに冷静に推理を展開したものの、大富豪の黒川家がこんなボロ口屋に何の用なのか……田中自身も不思議でしょうがないに違いない。

「で、では要件をうかがいます」田中はなるべく失礼にならないように丁寧な口調で注意していった。

「そんなに緊張なさらずに、ここを選んだ理由は一軒一軒こういうところをしらみつぶしに訪ねているからです。あなたは今まで見たどんな人よりも明晰だ」黒川氏が直々に行った。

「さて、要件だがこれだ」と言っつて黒川氏が出したのが一枚の写真だった。

写真には一枚のメモ用紙が写っていた。

そのメモ用紙には、一言「KHM 15」としか書いていなかった。「こ、これはなんでしょう……」田中が狼狽していると黒川氏が

説明を始めた。

「先日、私の19歳の娘が失踪して…過去に警察に頼んだ事件があったのだが、そこから警察が信用できなくなり今回も頼まなかったのだ、だからこうして私立の探偵のような職業を探しているのだ。その失踪した娘が部屋に唯一残したメモ用紙がこれなのだ。何かあってはまずいと現場保存をしておき写真だけ取ってきたということだ。この件についてはお父様にはまだついたらえていない。

「黒川氏が焦っていった。どうやら執事からこの件を聞いて単身赴任のロシアからすぐさま飛んで帰ってきたらしい。

「今までの話から察すると、現場を見せてくれるそうですね」

「はい、そうです。ちなみに住所は静岡県の………です  
お送りしましょうか？」

ここで卍屋のポリシーが出ましたあ

「いえ、いえ書いてある通り、私はいかなるところもママチャリで行くことが本社のポリシーなのです」誇らしげに言う田中。本社と行って社長：田中 唯一の社員：田中である

すると黒川氏は一瞬驚いた顔をしたが、すぐさまニコツと笑って答えた。

「それは頼もしい、では訪問を期待していますよ。明日の黄昏まで来てくだされば幸いです。」

「わかりました、では明日の午前11時前後にお伺いします。」

「よろしく願います。」そう言い残し黒川氏と執事の龍川は去っていた。

遠くで重厚なエンジン音が聞こえた気がした。聞こえたならリズムジンドラウ……

そん中で事務所内の地方ラジオは、静岡県内で一部の地域に集中し

て電柱に落書きがされていたり、ごみの不法投棄や、パーキングエリアの車内のごみのポイ捨てなどについて報道された、街の環境作りにふさわしくないとして気をつけるように注意するため報道しているようだ。

「さてと・・・」と言い田中は今回使用するママチャリ選びを始めた。母方の実家が自転車のマニアで世界中から様々な自転車を集めており、その中から数台もらったのだ。その中で見た目はママチャリじゃないが性能、商品名がママチャリの05-X146の超高性能をこいでいくとしよう。

05-X146の基本データ

ギアチェンジ7段速      瞬間最高時速55?/秒

平均時速35?/時      大量量産品ではあるが、ママチャリをスピード走りやすさの重点を置いた通常のマウンテンバイクとも引けを取らない優れ物、現在は非売品となっている。

さらに母方の祖父が改造に改造を重ね、タイヤは雪、雨対応、さらにはGPS発信機も付いているのでカーナビのような機能も付いている。これらの機能とかの有名なアップル社のiPhoneと組み合わせればもはや最強と呼べる代物になっている。

どうやらこの事務所から黒川邸まではやく110?ほどあるという。ちなみに田中は中学、高校共に陸上部の長距離種目の選手だった。体力は人より多い・・・田中はダウンコートに帽子、マフラー、手袋、耳あてなどの防寒対策をして出かけた。止まるかもしれないので着替えや充電器、ベストセラーの推理小説シリーズなどをバッグに入れた。

そんなことをしつつも iPhone をラジオモードにしてイヤホン  
を装着した。そして事務所のブレーカーを落とし事務所から出た。  
田中は愛車の随茶璃 05 - X146 のカギ穴に、カギを装着した、  
カチンと軽快な音を出してエンジンをスタートさせた。そして田中  
はカーナビ機能を起動し自転車にまたがった。

STORY

依頼（後書き）

なんか、メインのK&Yよりこっちのほうが、名探偵っぽいな…

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4370ba/>

---

卍屋 THE 随茶璃

2012年1月14日14時49分発行